

【巻頭言】

年頭にあって

のとうまさずみ
会長 桒藤眞純

あけましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては益々ご健勝で新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。平素は学友会活動に深いご理解とご協力を賜り誠に感謝申し上げます。

さて、私も会長就任から3年半余りが経過しました。これまでに延べ30支部で総会・懇親会が行われ、そのうち25支部に出席させていただきました。今、学友会イベントなどへの参加者の若返りが課題となっています。徐々に若い人たちの参加も増えつつあります。しかし卒業生会員の過半数近くが短大卒であることを考えるとまだまだ少数で寂しく思います。高度経済成長期頃までに卒業した人たちは、母校に対して「学ばせてもらった」という、感謝の気持ちから「母校」に対する帰属意識が強いように感じます。若い人にはそうした気持ちが薄いからなののでしょうか。或いは「学友会の意義」というものがはっきりしないからなののでしょうか。

では、「学友会の意義」とは何なのでしょう？

「同窓という絆で先輩と後輩が交流して...」、「年に一度、様々に活動している同窓生とのネットワークを広げ...」など、多様に考えられます。ここで、「...」の部分に「なにかを実現させたい」という意味の言葉として「京都医療科学大学の名声を高めたい」、「母校に対する高い求人率を維持したい」、「地域を越えて就職情報を得たい」、「元気なうちは働ける場所を確保したい」...などを入れて読んでみてください。

どうでしょうか「学友会の意義」が少し見えてきませんか。と云っても「同じ学校に学んだ者同士が、世代を超えて集まり、話したり飲んだり、そして最後に肩を組んで校歌を唄って親睦が深められればいいよ。そんなに難しく考えることもないよ。」という声も聞こえてきそうです。でも、懐かしさだけを求心力とした親睦団体では寂しく物足りなさも感じます、メリットを感じインセンティブを持てる仕組みも大切なことで今後の課題としたいと考えています。

ここで報告とお願いがあります。1 つ目は一昨年から懸案となっていました沖縄県が抜けた後の九州支部に関する報告です。福岡支部、大分支部、宮崎支部、鹿児島支部、熊本支部、長崎・佐賀支部、の6支部に再編されました。それぞれの地域で親交を深める会(京北会、大洛会など)があることを優先させた結果です。後に続く会員のため各支部の活発な活動を期待しています。

2 つ目は、昨年11月に2010年版会員名簿が発行されています。ネットワークを広げ、結束力の維持に会員名簿は大きく貢献しており、会の存続をも左右する大切な名簿です。しかし、購入の申し込みが非常に少なく心配です。経済不況下で広告協賛も得にくくなっており、会の財政として頒布部数だけが頼りです。何とぞご協力よろしくお願いいたします。

3 つ目は、今年5月21日(土)京都ホテルオークラで開催される『2011年学友会総会』についてです。京都医療科学大学の開学から4年を経て大学卒1期生が社会に巣立つ記念の年の総会です。依然、技師養成校の「4年制大学化」や新設校の誕生が見られますが、組織結束力を高めて母校発展の後盾となる活動を行うことも学友会の存在意義の一つであります。これまでに一度も総会に参加された事がない皆様方どうか是非一度顔を見せてください。心からお待ちしています。

最後に、「ウサギ」年にあたり、ウサギの「スピード」とカメの「着実さ」で、仕事をどんどん片づけようと云う『「前倒し」仕事術!』(中井紀之 著)を紹介します。その中には次のように書かれています。

最初から「いきなりレベルの高いもの」を目指そうとすると手を付けるのが億劫になってしまい、結果として「先延ばし」してしまいます。1つの仕事を前半と後半に分け、前半(ウサギ)は、細かい内容や体裁などを気にせず、取りあえず一気に仕上げ、後半(カメ)は、より良いものにするためにじっくり徹底的に見直し、完



成度を高めるというものです。「前倒し」で仕事を終わらせることによって、自分の時間がつくれ充実した人生を送れるのではないのでしょうか。前半はウサギ、後半はカメのごとくスピーディーかつ着実を実践し「先取り」の習慣を身につけたいものです。また、「兎の上り坂」という諺もあります。得意な分野で実力を発揮し、良い環境に恵まれて物事がとんとん拍子に進むような1年にもしたいものです。

皆様方のご健闘を心から祈念し新年の挨拶とさせていただきます。

以上

* 通巻 198 号 2011 年 1 月 10 日発行 (H22 - No.4) より